

## 学位請求論文審査報告書

氏名 森山結希

論文題目 漢訳大乘『涅槃経』の比較研究 — 「秘密蔵」の概念を中心として—

審査委員 主査 大谷大学教授 織田顕祐

博士（文学）【大谷大学】

副査 大谷大学教授 ローズ ロバート F

Ph.D【ハーバード大学】

大谷大学准教授 采畢晃

博士（文学）【大谷大学】

国際仏教学大学院大学教授 藤井教公

### I、論文内容の要旨

当該論文は、代表的な中期大乘経典である『大般涅槃経』の成立について、漢訳の六卷『泥洹経』（法顕訳）と四十卷『大般涅槃経』（曇無讖訳、以下大本と称する）の冒頭十巻とを比較して、後者は前者の単なる異訳ではないということを丹念に論証したものである。両者はほぼ同じような時代に中国の全く異なる地域で漢訳され、六卷『泥洹経』は、サンスクリット原典からの翻訳と考えられるチベット語訳とよく対応し、二つの漢訳の経文も一見するとよく対応すると見られるので、従来から大本の前半十巻は六卷『泥洹経』の単なる異訳であると考えられてきた。著者はこの点に疑問を感じ、六卷『泥洹経』には説かれていない「秘密蔵」という概念に注目し、それが経典の後半で思想的に大きく展開する契機になっているのであり、単なる異訳経典ではないということを綿密に論証したものである。

本論文はこのような関心にに基づき、以下の構成によって論点を整理している。

#### 序論

- 1、はじめに
- 2、『涅槃経』の諸翻訳
- 3、先行研究と本研究の方向性と方法
- 4、問題の所在
- 5、論文の方向性と構成

#### 本論

##### 第1章、曇無讖訳に現れる「秘密蔵」

第1節、大本における「秘密蔵」の存在

第2節、如来常住

第3節、伊字三点

小結

##### 第2章、「秘密蔵」の影響

第1節、大本四相品後半の「秘密蔵」

第2節、「波斯匿王」

第3節、「摩訶波闍波提憍曇弥」

小結

### 第3章、「秘密藏」と「仏性・如来性」

第1節、大本における「秘密藏」の用例

第2節、大本「秘密藏」に対応する六卷本「如来性」

第3節、「仏性・如来性」の用例に関する仮説の提示

小結

### 第4章、法顕訳との思想的相異

第1節、「秘密藏」や「伊字三点」のない『涅槃経』

第2節、「秘密藏」による増広の無い場合

第4節、如来性の使用のされ方

小結

## 結論

## 参考文献

序論では、当該論文に関係する諸経典の解題を整理し、先行研究を網羅的に紹介している。その際、先行研究を単に提示するのではなく、各先行研究の問題関心の中心に触れて、これまでの『涅槃経』研究史を振り返り問題点を指摘するようなものとなっている。その上で、本論文の問題関心が独自のものであることを示している。

第1章は、大本に現れる「秘密藏」の内容の検討である。先行研究を手掛かりに、六卷『泥洹経』に無い所説を整理した上で、「秘密藏」の初出箇所と言及する。六卷本に無い所説とは、①釈尊の入滅の宣言、②二種施食、③如来常住（純陀と文殊師利の論争）、④偏教文殊（秘密藏）、⑤伊字三点（哀歎品のもの）、⑥常楽我浄である。およそ哀歎品までの範囲で、大本の「秘密藏」に関する三つの増広を確認している。このうち、著者が「偏教文殊」と称する段落から「如来常住」思想を「秘密藏」の名称で呼び始めると指摘している点が重要である。その上で、これら大本の増広はすべて「秘密藏」と関わっていると指摘している。大本の「秘密藏」は、「如来常住」や「解脱・如来身（四相品では涅槃）・摩訶般若（伊字三点）」の思想を内包するものであり、秘密藏の「藏」は「法藏」という意味であるとする。

第2章は、「秘密藏」の導入によって、経説がどのように深化しているのかという点を検討している。「秘密藏」導入の直接的な影響として、大本巻第五の四相品の後半の増広を指摘し、「秘密藏」の「藏」は如来による秘匿ではないことを論証するためであり、他経典からの引用増広として、「波斯匿王」と「摩訶波闍波提憍曇弥」の挿話を取り上げている。「波斯匿王」の増広は、本来「無常」を示すものを「無常と常の関係」を中心に改めているのであり、「摩訶波闍波提憍曇弥」の挿話は、本来「三帰依」を説くものであるが、「伊字三点」を踏襲して「一義」に包括することに所説の中心があるとしている。

第3章は、大本の「秘密藏」という概念と「仏性・如来性」の関係について論及している。大本における「秘密藏」は、『涅槃経』前半部の様々な思想を内包する用語である。こうした

点を六巻本との比較によって明らかにした。その上で、大本は「秘密藏」という概念を導入することによって、六巻本に比べ「仏性・如来性」などの重要な思想を明確に表現することができるようになったと指摘している。この検討によって、大本前半十巻は六巻本の単なる同本異訳ではなく、經典のテーマを格段に進化させていると指摘する。さらに大本には「如来常住」開示以前に、「仏性」の語句を使用する箇所があり、この点から見れば、大本は『涅槃經』の思想がある程度深まった時期に成立した可能性や、翻訳の際に訳者が意図的に編集した可能性があることも指摘している。

第4章は、大本によって増広された諸思想を欠く六巻『泥洹經』は、本来どのような經典なのかという問題を確認している。六巻本は「如来常住」から派生する思想的展開に乏しく、また第三章で確認した、「仏性・如来性」を衆生と如来に関連するものによって使い分ける姿勢が無い。こうした点から、六巻本は「如来常住」から「悉有仏性」への展開を一応認めることができるが、中心はあくまでも「如来常住」思想を説く經典であると考えられるとする。

以上によって、大本は「秘密藏」という概念を導入することによって飛躍的に進化したのであり、六巻『泥洹經』の単なる異訳經典ではないという点を明確にしている。

## II、論文審査結果の要旨

まず全体的な視点から評価できる点は以下の通りである。大本『涅槃經』の「秘密藏」に注目して經典間の思想深化を考察するといった研究は前例がなく、着眼点が非常に良い。大本『涅槃經』は、「如来常住」「衆生仏性」などを説く重要な大乘經典であるが、四十巻と分量が多いことや所説が非常に難解で複雑な構成を持っているなどの理由によって、特定の教理・思想に注目する研究は多いが、經典自体を総体的に解明しようとする研究はこれまでも稀であった。こうした状況の中で本論文は後に述べるような問題点を持ってはいるが、一定の成果を獲得しているものとして評価することができる。その一例として、六巻本と大本との比較を通じて、後者の思想内容上の増広展開の合理的道筋を示し得たことは大きな成果である。また、その具体的方法として、ある特定の概念に注目して經典の深化を探求するという經典研究の方向性は非常に興味深いものであるとの意見もあった。この点は他の經典研究にも応用できる可能性を持っており、一つの具体例を示す論文であると言える。また本文中に図表（7頁、75頁）などを作成提示して問題点を視覚的に理解しやすいよう工夫している点も評価できると指摘された。さらに漢文經典の文意を極めて丁寧に考察しようとしている姿勢も評価できる。

次に全体的な問題点として以下のような指摘が為された。まず、日本語表記の不適切な箇所、不十分な箇所が少なからず存在すること。特に文末が断定的でなく、文意が判然としない箇所が存在すること。また引用漢文の訓読が基本通りでない箇所が存在することも指摘された。この点については訓読のみでなく漢文原典を併記すべきであるとの指摘も為された。また論文の構成に不整合な点があること。例えば序論における「論文の方向性と構成」が最後にあるが、これは最初に提示すべきであろう。こうした点が本論文の全体的な問題点である。

次に各章ごとに出された意見を具体的に記す。

第1章では、六巻本と大本に共通する「如来常住」の思想が、「二種施食」と「偏教文殊」という六巻本には存在しない所説を挟むことによって、六巻本の「如来常住」思想が「秘密蔵」と提示されるという記述(26-27頁)は、両者の違いを極めて明確に論理的に証明するものであり本論文の軸となるものであって重要な指摘であると評された。また、二種施食をきっかけに提示される「伊字三点」の思想が四相品以降には登場せず、この点は「伊字三点」の内容がそれ以後の文脈を提示しているのではないかと思われるとの指摘は(30頁)、『涅槃経』全体の思想を知る上で重要であるとの意見が出された。問題点としては、小結最後の「秘密蔵は法蔵という意味である」とする「法蔵」という概念については論文中全く触れられておらず、説明が必要であるとの指摘があった。

第2章では、唐突に四相品後半に言及しているが、大本における四相品の位置づけや、四相品自体が前半・後半に分けて考えることができることなどには全く触れていないので、説明不足であるとの指摘があった。また、「秘密蔵」の「秘密」と「蔵」の意味内容に言及する箇所(44-46頁)の文意が読み取りにくいとの指摘もあった。

第3章では、両経典を非常に丁寧に読み込み、課題を整理している点が評価できる。「漢訳『涅槃経』一仏性・如来性、品毎頻出表」(75頁)によって問題を視覚的に把握することができることは評価できる。その上でこの結果を根拠に、六巻本と大本では如来性から仏性へと用語が選択されているのではないかと指摘している。この指摘については、全体的に一定の傾向が確認できることは事実であるが、これは漢訳経典中での結論であり原典の事情は不明である。したがってこの点のみで結論づけることが可能だろうかとの疑義も出された。

第4章では、大本を一通り言及した後、遡って六巻本の特徴に及ぶという本論文の構成の分かりにくさが再度指摘された。思想史的な観点から見れば、こうした内容の章はもっと前にあるべきで、本論文の構成についての難点がここでも指摘された。また著者が結論で用いる「衆生視点と如来視点」(104頁)という見方は、おそらく『涅槃経』の中心思想である「如来常住」と「衆生仏性」に言及しようとしたものと考えられるが、この点は非常に重要な思想的課題であり、もう少し丁寧な論述が必要であろう。

以上のように、本論文はいくつかの問題点や不十分な点を含んではいるが、大部かつ難解な大乘『涅槃経』に正面から取り組み、緻密な論証によって一定の評価ができる結論を獲得している。もともと『涅槃経』それ自身を対象とする研究が稀有な現状にあって、本論文は看過することのできない内容を持つ著者独自の研究成果であると言いうる。こうした点から、本論文は課程博士論文として十分に評価できるものである。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により、2019年1月7日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、森山結希に大谷大学博士(文学)の学位を授与することが適当と判断した。